The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	誠に就いて
Author(s)	服部, 宇之吉
Citation	懐徳. 1932, 10, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88859
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懷德 第十號

藝文

誠に就いて

服部宇之吉

孔子教を立て道を明にして後三千の弟子散じて四方に在り孔子の道に對する尊信と孔子の人格に對する崇敬とを懷きて主して王侯貴人の間に說き後年孔子の道が殆ど國教となるの素地を爲せり。而して孔子の道をして形而上學的基礎の上に立たしめたるの功は聖孫子思を推さゞるを得ず、子思の師曾子は意志の人、卽ち實行の人なりしが子思は寧ろ哲學的思索に長じ從來の思想の系統に依り更に一步を進めて孔子の道の形而上學的根據を明かにしたり、其の著せる所の書の今に存するものは中庸あるのみ。此の書に關しては或は始めに中庸を說き後に誠を說く、元と是れ二編の書なるを後人深く察せずして妄に合せて一編と爲せるものなりと論ずる者あれども中庸と誠明とは思想の內容に於て緊密に

相關係し其の間に思想展開の徑路の明かに認めらるゝものあり。本來一編の書たりし事を疑はず、或は中庸以前に於て誠を說ける者少し。子思が誠を說けるは老子に對抗せんが爲なり、老子は孔子の道を以て僞なりと爲せるを以て子思敢然として聖人の道の誠なることを說けるものなりと論ずる者あり。中庸が其の終末に於て仲尼祖述堯舜、憲章文武、云々と云へるは、所謂吾が佛尊しの流にて他派に對して孔子の道の尊きを示さんとするものと思ふものあるべけれど實は然らず、中庸の書は道を明かにするものにして、道は聖人の之を修めて敎を立つるに依りて明かとなる、而して聖人の能く敎を立つる所以は、其の性至誠なるに在り、吾人は聖人の敎に依りて道を知り道を行ふことを得、故に聖人修道立敎の功に對し深き感謝と崇敬とを有せざるべからず、是れ中庸が孔子の德を讃美して卷を結びたる所以なり。

老子は孔子の道に於て最も重せらるゝ禮に關しては忠信之薄而亂之首也と云へるも未だ孔子の道を僞と謂ひたることあらず。

又大道廢有仁義と云ひたれども仁義に上下の別あることを許し、上仁の德と相近きことを認めたり。亦以て孔子の道を必らずしも僞と謂へるに非らざるを知るべし。之を要するに老子が孔子の道を僞なりと謂へることなきに必ず誠を說きて之に對せんか是れ的無き矢を放つの類のみ、或は中庸が孟子と同じ文句を有するものあるに依り、中庸は孟子に取りて作りたるものなり、子思の作に非ずと論ずる

ものあり、是れ後世の作者が前人の說を引用する場合には必ずその氏名若しくは書名を擧げ、若し然らざる時は剽竊と譏らるゝの例に依りて云ふものなり、然るに先秦時代に於ては詩書を引く場合には必ず詩曰又は書曰と云ふもその他の場合に於ては必らずしも出處を明言せざりしものなれば、孟子が其の師の師たる子思の書に取りて、而して子思の名を記さゞるも亦怪しむに足らず、中庸が孟子と同じ文句を有するを以て直に孟子に取れりと爲すは不可なり。此くの如き理由を以て中庸は子思が孔子の道の根據を明かにせんとて作りしものなりとし、而して其の中に說くところの誠に就きて述べんとす。

戰國時代以前に於て誠を說ける者少し、尙書太甲下に鬼神無常享、享于克誠。とあるを以て眞西山は誠を言ふの始めとなしたれども、古文尙書なれば證となし難し。又舜典に溫恭允塞とある允を誠に同じと爲す者あれども、此の句は東晉の時に舜典の首に加へたる二十八字中のものなれば亦證と爲し難し、允塞の二字は毛詩常武編に見ゆたるものにして、鄭玄は允は信を守るの義と爲し、尙書孔安國傳に依れば允は副詞たるのみ、何れにしても誠とは同じからず。中庸以前に誠を說けるもの少しと雖も、誠に近き概念の說かれたるもの數種あり、此等の思想が相流注して遂に誠と云ふ概念に歸着せるものなるべし、誠に近き概念とは

(一)恆　(二)固　(三)壹　(四)中　(五)信　(六)忱又は諶等是れなり。

恆は先づ周易に䷟恆亨、无咎利貞、利有攸往。とあり、彖傳に恆久也、恆亨无咎利貞、久於其道也、天地之道、恆久、而不已也、日月得天、而能久照、四時變化、而能久成聖人久於其道、天下化成、觀其所恆、而天地萬物之情可見矣。とあり、恆は德の美なるものたるを知るべし。九三の爻辭に不恆其德、或承之羞、貞吝。とあり、人其德を恆にせざれば羞を承くることあるを云ふ。亦恆は德の美なるものたるを見るべし、然るに六五の爻辭に恆其德貞、婦人吉、夫子凶、とあり、象傳に婦人貞吉、從一而終也、夫子制義、從婦凶也。と云へり、蓋し五は尊位にして、元來陽位なり、而して五は二に應ず今五つ位に在るものは陰にして二の位にあるものは陽なり陰は陽に從ふものなれば、五、二に從はんとする象あり、陰の陽に從ふは婦人に在りては吉なるも、陽が陰に從ふは凶なりとす、婦人は專制の義なし故に從を以て美德となす、男子は外にありて社會的又國家的事務に當る、而して事の生ずるや一ならず、所謂杓子定規にて之を律せんか義を制する所以に非ず、新しき事に處するには又自ら新しき法なかるべからず、據る所の根本主義は之を變せざるも處置の方法は場合によりて變せざるべからず、是れ德を恆にするの不可なる所以なり、此の如く變化したる事情の下に義に據りて宜しきを制することを知らざる場合には、恆も其の美を失ふことゝなり、恆は如何なる場合にも德の美なるものとは謂ふべからざるなり。

又論語子路篇に子曰、南人有言、曰、人而無恆、不可以作巫醫、とあり巫醫は韓退之の師說に百工

と並べ稱せる程にて古は賤しきものとせられたるが其の賤しき業を營むにすら恆の心なかるべからずと云へるものと見れば恆は德の美なるものと謂ふべし。

孟子梁惠王上篇に無恆產而有恆心者、唯士爲能、若民無恆產、因無恆心、苟無恆心、放辟邪侈、無不爲己、とあるは又爲すべからざる事と爲さゞるべからざることゝを知ること明かにして其の爲すべからずと知れる事をば如何なる場合にも即ち利を以て誘はるゝとも力を以て威さるゝとも斷じて之を爲さゞるを恆心あるの人と云ひ、所謂士即ち書を讀み道を知りて義に明かなる人のみ恆產無くとも之を能くすと云へるものなり、是れ亦恆の美なる者を以て言へるなり。

論語述而篇に孔子が善人吾不得而見之矣、得見有恆者斯可矣。と云へるは恆ある者の少きを嘆せるものなり其の所謂恆有りとは孔子自ら亡而爲有、虛而爲盈、約而爲泰、難乎有恆矣。と云るに依れば主として物質的に缺乏若しくは不足せるを十分にして餘りあるが如く表面を飾り裝ふを以て恆無しと云へるものなるべし。蓋し斯くの如きは所謂虛榮の事にして一旦人に對し表面を扮飾すればその扮飾を實らしくせんが爲めに如何なる手段をも厭はず遂には爲すまじき事をも爲すに至り恆なきに陷るべし、かく恆有る者は守るところ有りて爲さざるところ有るを以て、周易繫辭下篇には恆者德之固也と云へり。

固の字は荀子禮論篇に禮之中焉能勿易、謂之能固。と云へるは禮義を守りて易らざるを以て固と謂

へるものにて固の美なる場合なり。

然るに孟子告子下篇に固哉高叟之爲詩也と云へる場合の固は一に偏して固陋なるを以て云へるなり、高叟とは高子と云へる學者のことにして詩經に見ゆる小辨の詩を親を怨みたるの故を以て小人の詩なりと云へるを聞きて孟子が其の固陋にして事理に通ぜざるを譏れるなり即ち親を怨むに二つの場合あり、親の過小なるに之を怨むは是れ小人の事なり。之に反して親の過大なるに怨みざるは孝子の事に非ず、孝子の怨むは親をして反省せしめて其過を遂げざらしめんとする誠心に出づるものにして之を怨みざるは親を以て終に諫むべからずと爲すものなり、是れ親の過大なるに怨みざるは孝子の事に非ずと謂ふ所以なり。小辨は親の過の大なる場合なれば之を怨むは實に孝子の事なり。然るを高子が親を怨みたれば小人の詩なりと爲せるは怨むに二つの場合あることを知らざる固陋の見解に出づ、論語學而篇に君子不重則不威、學則不固。とあり、朱子等は不重を以て不威と學則不固との條件となしたれどもその說非なり、不重則不威を一句となし學則不固を又一句となして解すべし。學則不固とは學びて道を知り義に明かなれば固陋不通の弊を免るべしとの義なり。

論語子罕篇に孔子が可與共學、未可與適道、可與適道、未可與立、可與立、未可與權。と云へる權は即ち不固の場合なるべし、孔子の意は今人有り共に學ぶに可なるも我が學ぶ所以の動機は道を知り道を行ひて人格を完成するに在るに人の學ぶ所以の動機は祿を得るに在る時は之と共道に適くべから

ずその人の學ぶ所以の動機が我れと同じき時は共に道に適くに可なるも決意堅からず努力足らずして我れと同じく進む能はざる場合には之を共に立つべからず、又決意も堅く努力も十分にして我れと進みを同じくする場合には共に立つに可なるもその人義を知ること明かならざるが爲めに聖賢の敎へたる所と異りたる事情境遇に遭遇する場合には之に處する所以の道を制することを能くせざる者有り、是れ共に權るべからざるなり、能く權るは即ち固ならざる所以なり、學者或は反經而合經を以て權を說く者有れども權は要するに義を制するの意に外ならず此くの如く固にも美なる場合と然らざる場合とあり。

壹に就いては禮記緇衣篇に尹吉曰、惟尹躬暨湯、咸有一德。とあり、尹吉とは尹告即ち尹誥の誤なるべく、蓋し尙書の篇名なり今の古文尙書には此の篇なく上に擧げたる句は古文尙書咸有一德篇中にあり一德は、明治天皇の敎育に關する勅語に仰せられたるものとその義を異にし純壹の德の義なり、毛詩衛風氓篇に女也不爽、士貳其行、士也罔極、二三其德。と云ひ又成公八年左傳に魯の季文子が霸主將德是以、而二三其德、何以長有諸侯乎。と云へる二三其德は何れも一德の反對を言へるものなり。氓篇にありては昔或る士即ち或男が或る女と結婚せるに男の家道貧困なるに拘らず女は能く節を守り夫に事へたるに男は家計の困難に伴ひ恩意漸く薄くなり、女を顧みざらんとし昔と態度を異にせるを以て貳其行。又二三其德と云へるなり、左傳にありては晉が汶陽の田を齊に取りて魯に與へたるに數年

にして又之を齊に歸せと魯に命じたるにより季文子二三其德と謂ひたるなり。卽ち言行の前後矛盾不一致なるを二三其德と云ふに對して見れば一德とは言行の終始一致する結果を生ずるもの卽ち純壹の德を意味し他の語を以て云へば人格の統一に外ならず。

中の字の文獻に見ゆたるは論語堯曰篇に引ける堯の舜に命じたる語を最も古しと爲すべし、堯曰篇に引ける語は蓋し尙書の文なるべし、其の語に曰く咨爾舜、天之曆數在爾躬、允執其中、四海困窮、天祿永終。と他の句の解釋は暫く之を措き允執其中の句のみに就いて言はん、先づ朱子の說を見るに中者無過不及之名と云へり。更に語類を見るに聖賢言中有二義と云ひて中庸に所謂天下之大本と時中とを以て說き天下之大本なるものは執り得べきものに非ず旣に執ると言ふ以上當に時中の中を云ふものと解すべし。時中とは事事物物の上に自然に又天然に有るところの中にして人の安排を待たざるものなり、卽ち天理の事物の上に存するものを謂ふと說けり其の說く所猶ほ抽象的又は形式的槪念たることを免れざるが如し、事々物々の上に存すと云ふ天理をば如何にして認識するかに至りては說く所なし中庸に孔子の語として舜の大知なることを讃美したる中に執其兩端、用其中於民。と云へるあり。朱子之を解して兩端謂衆論不同之極致。蓋凡物皆有兩端。如小大厚薄之類、於善之中、又執其兩端、而量度以取中。然後用之、則其擇之審、而行之至矣。と云へり、更に語類を見るに一の例を擧げて說明し例へば人の功ある者に賞を與へんとする場合或は萬金を與ふべしと云ひ或は千金を與ふべし

と云ひ或は百金を與ふべしと云ひ或は十金を與ふべしと云ふ者ありとせんに萬金は至厚なり十金は至薄なり此の厚薄の中を權りて賞を決すべし當に萬金を賞すべくんば萬金を賞するも中なり當に十金を賞すべくんば十金を賞するは中なり、必らずしも萬金と十金との中間を中とするに非ず要は天理の在る所に從ふて決するにありと云へり。此の說明に依れば萬金を賞すべきか十金を賞すべきか將た二者の中間を取りて賞すべきかを決定するは別に其の標準なかるべからず、標準は所謂天理以外には有り得べからざれば究竟するに天理を執りて中を制することゝなるべく中を執るには非ざるべし。是れ朱子の說の從ひ難き所以なり、堯が舜に命じたりといふ允執其中の語は古文尙書大禹謨に取られて三句を增加して人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中。となれり蔡沈の傳に人心は私なり易くして公なり難し故に危し道心は明かなり難くして昧くなり易し故に微なり能く精以て之を察して形質の私を雜へず能く一以て之を守りて義理の正に純にして道心常に之が主となりて人心命を聽く時は乃ち危きもの安く微なるもの著れ動靜云爲自ら過不及の差無くして信に其の中を執らんと云へり、此れも亦天理を以て中を說くの說なり、大禹謨は古文なれば深く之を論せざるべし、飜つて古註を檢するに中庸の鄭玄註に兩端過與不及也、用其中於民、賢與不肖、皆能行之也。とあり其の過不及といふ文字は朱子の用ひたるものと同じきも其の意味は則ち大に異なれり過は賢者は之に過ぐるを以て言ひ不及とは不肖者は之に及ばざるを以て言ふ、而して道は賢者と不肖者との同じく由る所なり、更に之を詳かにせば賢

者卽ち知ること明かに行ふこと高き人は所謂道を見ること高きに過ぎ不肖者は勿論中人と雖も之を知ること能はず又之を行ふこと能はざるところあり、例へば賢者は自己の存在の原因を知ること深く之に對する感謝報恩の念亦強く隨つて報謝を實現すること亦甚だ厚し之に反して不肖者は道を見ること低きに過ぎ賢者は勿論中人と雖も甘心すること能はず、例へば自己存在の原因を知ること極めて淺く之に對する感謝報恩の念も亦極めて弱く直接の原因たる父母に對してすら其の死するや卽ち之を忘る況んや祖先をや故に賢者の見る所に從つて人の道を立てんか中人と雖も行ふことを難しとせん、不肖者の見る所に從つて人の道を立てんか中人と雖も滿足せざるべし高きに過ぎず低きに失せず、中人の能く知り得亦た能く行ひ得る所を標準として人の道を立て賢者をして俯して之に就かしめ不肖者をして企てゝ之に及びしめ以て一般の準則となしたるものを中と稱するなり。堯が舜に執れと命じたるところの中、孔子が舜が民に用ひたりと稱するところの中、皆是れなり、人の道と言へば抽象的概念なるが如くなるも、古に在りては之を具體化して禮と爲せり、禮は聖人の政治敎化の權威を有する者の制して民に命ずる所のものなり。

故に洪範には極を建つと言へり。洪範とは大法卽ち天下國家を治むるの大法を說けるものにして之を分けて九疇となしその第五を皇極と云ひ其の說明に皇建其有極云々とあり。皇極二字に就いては種々の解釋あれども皇を君と爲し極を中と爲す說從ふべし、卽ち皇極とは君の中と云ふことにして皇建

其有極とは君がその執る所の中を立てゝ民に由るべきの標準を示すことなり、既に立てゝ示すと云ふ以上は單に至極の道理等を以て說くべきものに非ず、民の行爲の準則となるべきものに非ざれば立てゝ示すもその効無かるべし、卽ち極は實質を以て云へば行爲の軌範たる禮のことならざるべからず、皇極の說明に君の立てゝ示さるゝ道は坦々蕩々として正直なる道にして少しの反則も偏頗もなき大中至正の道なることを云ひ民能く此の道に從へば遂に有極卽ち中有る人となるべし、中に於ては凡ての人が一致するものなれば萬民盡く有極となると云ふことは卽ち萬民德を一にすることゝなるべし。

而して君は本と有極の人、卽ち生きたる極の其のものなれば萬民德を一にして君に歸一し君民盡く德を一にするに至る是れ皇極の理想なり、此の說明によれば極卽ち中は個性の調和的發達を意味する方面あり。是れ中庸の作者が知仁勇の調和卽ち知情意の調和を以て和と爲し和の可能なる所以を中と稱し中和を以て人格の完成を說ける所以なるべし。

信に就きては論語述而篇に子以四敎文行忠信。とあるほどにして孔子の敎學に於て重んぜられたるものゝ一なり、漢儒が五行に依りて五常を說くや信を五常に列したるも亦た故なきに非らず、今論語等に見ゆる信を一々擧げんことは煩に涉るを以て論語中の一二を擧ぐるに止めんとす、卽ち爲政篇に大車に輗無く小車に軏無くんば何を以てか車を行らんと言ひて人信無くんば世に立つべからざるを論じ、信を輗軏に比せり、大車は牛を駕するものにして二本の轅を用ひ小車は馬を駕するものにして一

本の輈を用ひ轅輈共に一本の横木を之に結ひ附け以て牛馬を駕するの用となす而して横木を結び附くるに「くさび」を以てす其の「くさび」を輗又は軏と稱せり。「くさび」は小なれども牛馬が車を引く力の根本を爲すものなれば信は小なるに似て人と人とを結びつけて社會的生活を可能ならしむるものとして其の力極めて偉大なるものあるに比せるなり、孔子は更に顏淵篇に於て子貢の政を問へるに答へて信を政治道德の最も重要なるものとして說けり、卽ち政の三大要件として足兵、足食、及民信之を說き子貢が止むを得ずして何れか一を去らざるべからざる場合には何を去るべきかと問ひしに兵を去れと答へ更に殘りの二につき一を去るべき場合に就きて問ひしに食を去れと答へ民無信不立と云ひて信の絕對に去るべからざることを說けり、この二つの信の字を國民の爲政者に對する信賴と解釋する者あれどもそは誤りにして爲政者の國民に對する信義を以て解釋すべきものなり、孔子の說を推し廣むれば自ら國際信義の說となるべし、但孔子未だ之を說かざるのみ。

忱又は諶につきては尙書咸有一德篇に天難諶、命靡常。とあれども古文なれば證と爲すべからずその本づく所は詩大明篇に天難諶、不易維王。とあり又尙書君奭篇に天命不易、天難諶とある等なるべし諶は忱と同義にして俗語に所謂「あてにすることが出來る」と云ふほどの意味なり。

以上說く所の諸德何れも相似て稍々同じからざる點あり未だ中庸の誠と相同じきものとなすべからずと雖も此等の諸槪念より漸く發達して誠の說かれるに至れるものなるべし、今次に誠に就いて論ず

べし。

中庸に云ふ誠者之道也、誠之者人之道也、誠者不勉而中、不思而得、從容中道聖人也、誠之者擇善而固執之者也、と朱子は誠を眞實無妄と解し、天之道を天理之本然、人之道を人事之當然と解し聖人從容として道に中る亦天之道なり云々と云へり、其の意を推すに誠を天に就いて言ふ場合と人に就いて言ふ場合とに分けて考へたるものゝ如し、朱子は前者を實理と爲し後者を實心と爲せり、此の思想を明白に說けるものは朱子の門下陳北溪なり。彼れは天道人道有文樣分別とて、(一)上天を以て之を言へば維天之命、於穆不已、元亨利貞、貞而元復、萬古循環無一息之閒云々と云へり。此れ理の流行して萬物の生成化育し森羅萬象の發生すること古今東西常に差繆無きを以て言ふものにして天理之本然とは言ふべけれども、誠とは言ふべからず之を誠と謂ふは確かに中庸の意にあらず、中庸は道を明かにする目的を以て作らる、道は子思が劈頭に說けるが如く人の性に率ふものなりと雖も、何人も能く自然に道を物り又道を行ふものにあらず、必ず聖人の道を知り易く又行ひ得べく修治して敎を立つるに依つて始めて人能く道を知り又之を行ひ得るなり、此れ儒敎が聖人修道立敎の功を讃美し且之に對し感謝の忱を致す所以なり。聖人も亦人にあらずや何を以て能へ修道立敎の功を立て得るか、聖人一に止まらず後聖は前聖の敎に依つて道を知りて自ら聖德を修め得て更に前緒を繼ぎて敎を立て得べしと雖も、漸次溯るの極終に前聖無き最初の聖人に到達すべし、此れ儒敎に於て天縱又は天成の聖人を容

るす所以なり。中庸の作者が知に於ては生知、學知及び困知の三種又行に於ては安行、利行及び勉行の三種有りと爲し而して其の成功に及びては一なり、即ち皆聖人となると說きたり、生知安行は天成の聖人の事にして學知利行以下は自ら成れる聖人なり、生知安行の聖人は其の性至誠にして所謂不勉而中云々なり、學知利行以下の者は所謂誠之の工夫を積みて遂に亦至誠の境界に入るものなり、中庸に誠を說ける關係此くの如し。即ち誠は人格の絕對自由の境地にして天理の流行の眞實なることは全然相涉らざるものなり。然るを天之道とあるに依つて直に天理之本然と爲すは誤れり、須らく鄭玄が天性と解せるに從ふべし、陳北溪は（二）第二段に於て誠は人に就いて言へば天道流行、賦予於人、而人受之以爲性。と云へり、此れ即ち中庸の所謂誠なり。

組織を自然界に於ける眞實道理の人に賦予されたるものと爲す點は中庸と異なり朱子等の所謂理は非人格的のものなれば誠は其の解釋に從へば當然人格觀念を容れざるものとなる故に（二）の場合に於ても陳北溪は實理の自然發見といふ點に重きを置き人格觀念、自由觀念は殆ど現はれず、陳北溪は更に（三）人做工夫處に就いて考ふべき誠有りと爲せり、即ち懿實不欺之理。乃是人事之當然。と云へり。是れ朱子が但誠は天に在りては實理、人に在りては實心と云へるに本づけるものなるべく朱子は謝上蔡が後人專ら理の上に於て誠を說くを非とし心の上に於て說かざれば未だ是ならずと言へるに同意し、實理と誠懿とを以て誠を說けるなり、新安倪氏は實理を以て言へば唯天理のみ誠にして人欲の如きは

誠と謂ふべからず、實心を以て言へば小人の惡を爲すも亦誠と謂ふべきものあるべしと云へり、此に至れば宋元人の所謂誠は明に中庸に擇善而固執之と云ひ又自明誠と云へると矛盾す。

中庸又云ふ誠者物之終始、不誠無物。と此の物の字は大學に所謂格物の物の字と同じく事の義に解すべきものなるに朱子又解して萬物のことゝ爲し天下の物皆實理の爲すところなり故に必らず是の理を得て然る後に是の物有り、得るところの理既に盡くる時は是の物亦盡きて有ることなしと云へり、朱子が孝にして孝に誠ならざれば孝なし弟にして弟に誠あらざれば弟なしと云へるは正に中庸の意に合するものなるが、草木の萠芽の發生より枯死するに至るまでを實理の至と實理の盡とを以て說けるが如きは明に中庸の旨にあらず、況や氣の如きは至と盡とあるべきも理には至盡を云ふべからず、朱子が必ず此かる說を爲す所以は其の理氣哲學に於て理を自然界と精神人事界とに於て流行發見すと爲し原來人の道たるところの道を自然理法と爲せるのみならず道體卽ち道の本體を自然理法の關係に於て求めたる思想系統の結果に外ならず。

前に既に述べたるが如く中庸は誠を以て聖人の性と爲し、誠之を以て賢人以下凡ての人の當に努むべきの道となし、誠之の工夫を積みて己まざる時は遂に能く誠の境地に入ると爲せり、而して誠之の工夫を說明して擇善而固執之と云へり、この說明に就いて考ふるに擇善は知の事にして固執は意の事なり。知能く善を擇ぶも意の能く固く之を執るには二者の中間に更に或る物の介在する事を必要とす、

知は直に意の上に作用すること能はず、必らず情の二者を聯絡するあるを要す、是れ中庸作者が擇善と固執との間に而の字を下したる所以なり、知の善を知ること明に情の善の爲さゞるべからざるを知ること切に善を喜ぶこと篤く而して後に意が善に向つて行動することゝなるなり。

即ち誠之の工夫は究竟するに知情意三者が善に歸一することを意味す、他の語を以て言へば誠之は知情意の調和統一即ち人格の統一を意味するものなり、知る可し誠が人格の統一、人格の絶對自由を意味することを。是れ宋儒が非人格的と斷言する所の天理は誠と相同じきことを得ざる所以なり。

完全に統一されたる人格、絶對に自由なる人格は必らず其の道に久しくして恆なり、唯其れ恆なり故に能く人を化し物を成して天下化成す、而して能く事に應じて義を制し固陋不通の失無し所謂泛く應じ曲に當り萬殊にして而して其の本に一なり、變通自在窮まるところ無くして而して執持するところは常に一なり、言行に表裏陰陽無く其の德常に純壹なり故に其の言信を置くべく忱とすべし、中庸は中を天下之大本と爲し、和を天下之達道と爲す、和は知情意の調和にして中は調和の可能なる所以の本なり、和を致すことに依つて中は遂に實現せられて完全なる知情意の調和を見るべし、中庸は智仁勇の調和を以て之を說けり。誠と中とは相似て而して異なれり、中は人格の統一されて偏する處なく圓滿なるを以て言ひ、誠は人格の自由を主として言ふ自由なる人格は他の人格を感化するの力有り、故に誠は能く人を動かして之を化するのみならず進んで天下の萬物をして皆其の性を遂げしめ以て天

地の化育を賛す、此の人を動かすところの力あることが誠の特色にして至誠は神に通ずべし、況や人に於ておや、至誠の人を動かすは時と所とに局限さるゝことなし、古來至誠の人は千古に亘りて人を動かし又國を越ゑて人を化するものなり、而して其の能く人を動かす所以を求むれば自由なる人格に含まるゝところの誠懿卽ち朱子の所謂の實心に在り、朱子は實理を重く見たるも實理は人を動かす底の力無し、獨り實心能く人を動かす實心は言語動作に見はれて人の心を動かすものなり、善に明かなるよりして誠となりし以上は實心惡をなすことは有り得べからず、人は惡と知るものを我は過つて善と爲して實心之を爲すことは有り得べきことに屬するも自誠明の人にも自明誠の人にも惡を過つて善と爲すこと有り得べからざるなり。

孔子が先聖の道を集めて大成したることは孟子の云へる所なるが、大成とは今の語を以てすれば體系づけるといふに外ならず、凡そ體系を成すには根本原則なかるべからず、孔子は何を以て根本原則となしたるか、論語に孔子が曾子に告げて吾道一以貫之と曰ひ子貢に告げて予一以貫之と曰へることと見ゑたるが、孔子未だ曾つて一の何たるかを言はず、子貢も亦說く所なし、獨り曾子は同門の問に答へて夫子之道、忠恕而已矣。を云へり此れ一を正面より解釋せずして一に達すべき徑路又は手段に就いて說明せる物なり。忠恕二字を擧げたるも要は恕の一字にあり、恕は所謂己を推して人に及すものにして己の心も人の心も相同じと云ふ前提の下に己の心を以て人の心を忖度するものなり、其の相同

じと爲す所の心は僞らず飾らざる心卽ち眞心ならざるべからず、故に恕の根柢として忠を說けるなり、此れ忠恕と言ふも要は恕にありと爲す所以なり。恕に由つて達すべきものは何ぞ仁のみ、卽ち孔子の所謂一とは仁是れなり、而して仁に所謂專言と偏言との別あり、絕對と相對との謂なり、偏言卽ち相對の仁は義禮智等と併稱又は對稱せらるゝものにして專言卽ち絕對の仁とは義禮智等を融合せる渾然たる德なり。後者に從れば仁は人の本性の完全なる實現にして然も實現したる人格は自ら一轉して天下の人格を實現せしめんとする努力を生じ仁は自己實現と普遍的實現とを併せて言はる、此く見來る時は仁と誠とも亦相同じきかの感あり、然り相同じき方面あること勿論にして亦相同じからざる方面もあり、仁は愛を以て本質となす人の本性に愛他性あることを認め、之に立脚して說かる故に個性の實現を言ふも實は愛の方面より見たる個性にして普遍的實現を說くも亦愛他の本性の當然の發現となす、是れ誠と相異なる點なりとす、又仁は本性の實現とせらるゝも人格の統一、人格の自由の觀念甚だ强きに非ず隨つて誠は人格の力を高調する方面の事は仁に於ては見る所少なし。

儒敎の中心概念は道の一字にあり、道は人性に循ふといふ意味に於て自律的のものなり、聖人之を修めて敎を立て、吾人は聖人の敎に依つて道を行ふことを得、道を行ふことに依りて自己の本性を實現する結果、或は中となり、或は仁となり、或は誠となる、中は主として知情意の調和統一の方面より名づけ、仁は主として愛他の本性の實現の上より名づけ、而して誠は知情意か善に歸一したる人格の絕對自由の境地を以て名づけ、人格の能く人を動かし化する力を高調するものなり。（昭和六年十月三日記念講演）